

行方市出身作家 座談会

11月15日(月)、行方の魅力の再発見やシビックプライドの醸成を目的に、本市未来のまちづくり協議会委員の木村アナウンサーを聞き手に迎え、本市シティブロモーション推進懇談会委員(以下「CP委員」という。)の女性作家二人による座談会を開催しました。前号に続いて後編は、行方市の魅力、昔に戻れたら、行方市の若者にエール、お二人の令和4年度の抱負についてお送りします。



きむら
木村さおりさん

ぬかがみお
額賀濤さん

こばやしみつえ
小林光恵さん

4. 外から見た行方

木村 お二人は行方を転出されていらっしやいますけど、一回離れてみて気付いた行方の良さなどありますか。

小林 行方を出て30年くらい都内において、それからつくばに引越して10年ちよつとになるんですけど、大きな霞ヶ浦の向こうに筑波山が見える感じがとてもいいなって思っています。まだ橋がなかった昔、霞ヶ浦沿いに石岡の方へ行く景色もすごく良かったです。今の景色もすごくいいですし、二つの湖があるゆつたりとして心豊かな地域。そんな風に思うようになりましたね。

木村 額賀さんはいかがですか。

額賀 私は地元を出て12年くらい経つんですけど、分かったのは、ご飯がおいしかったんだということです。実家でお米を作ってます。毎年50kgの大きい袋で送ってもらって、それを一年食べるというのをやっています。最近何かのきっかけで、知り合いの作家さんや担当の編集の人にあげるようになったんですけど「おいしいお米って、例えば魚沼のコシヒカリとかを思ってたけど、茨城みたい

なところにあるんだね。すごくおいしい」って言われました。そう言われると、確かにおいしいってなったんですよ。地元にいた時って、毎日それを食べているからそれが平均になりますよね。でも離れてみると、私が知っていた平均は、世の中の平均よりすごく高いと知りました。お米とかサツマイモとかおいしかったと思いますね。

5. 行方帰省メシとタスキメシ

木村 ふるさとの魅力って離れてみて気付くことってありますよね。今回の座談会のサブテーマが「食」ということです。「食」のあるまちってすごく魅力的だと言われることが多いです。お二人にもおいしいものがある、景色も素晴らしいというお話がありました。

小林さんには「帰省メシ」という、市出身の大学生が帰省した時に食べるものということで、市のホームページに出稿いただいています。額賀さんは、箱根駅伝と「食」をコラボさせた小説「タスキメシ」を書かれています。行方の食といえば、ぱつと思ひ浮かぶものはないのでしょうか。



行方 帰省メシ

小林 「帰省メシ」の取材でアンケートを取った時に多いと思ったのは汁物ですね。けんちん汁とか豚汁とかが多くて、しかもご家庭によって入れるものが違ったり、味付けが違うんだなっていうのが見えてきました。それがすごく楽しみなんだという声もあったので、葉物野菜、里芋や大根などの何気ない野菜が充実してると思いますね。

木村 行方では、年間80品目以上の野菜が作られてますよね。近所のスーパーに行けば何でもそろってますね。

小林 汁物とかにそういう野菜をいっぱい入れて食べられますし、ご家庭によって味が違うし、そこにも行方らしさが出ているだろうなと思ったりしました。

木村 「帰省メシ」のサイトを拝見しても、行方市産の野菜を使っていることをお話されてましたよね。

小林 大学生は、アパートに帰るたびにたくさん野菜持たされてましたね。それを学生たちは、うれしいって喜んでました。重いか言わないんだなと思いましたね。

木村 額賀さんは大学生の頃、どうでしたか。

額賀 私は野菜よりお米でしたね。大学生くらいから20代は、お米があれば生きられるじゃないですか。大きいお米の袋を送ってもらったんですけど、それを宅配便のお兄さんが、アパートの階段を上がって届けてくださいましたね。「すいません、玄関まで大丈夫です」って言って、玄関から自分で一生懸命引きずってましたね。それがなくなってくると、そろそろ新米が食べられるかなと思っただら、またお米が送られてって感じでした。

木村 途切れないわけですね。行方の自作米、うらやましい限りです。「タスキメシ」の中にも食べたくなるような、おいしいメニューがたくさん出てくると思います。アスパラと里芋と豚肉の照り焼き炒め、トマトのドライカレーや、



ピーマンの肉巻きとかですね。これらは、行方の野菜をイメージして浮かんだんですか。

額賀 そうですね。イメージして考えたといっても大概のものはあるから困らなかったです。イモしかないつていう感じではないですものね。

小林 野菜は大概ありますからね。今はチンゲンサイとか、前はなかったものもいろいろ生産されていますからね。

額賀 最近はパクチーも育てるので、何でもできますね。

木村 逆に、こういう「食」が行方にあつたらいいな、こんなのがあつたらいいなっていうアイデアはありますか。

小林 食材は、野菜、肉、卵、シラウオもありますからね。

木村 こちらの店のシラウオのピザおいしかったですね。行方産シラウオをいっぱい使ってます。

額賀 たくさん食べました。

小林 個人としては、そういった食材を生かすお店やレストランが、もつといっぱいあってもいいと思います。カフェとかも。

木村 ちなみに、こちら上野にあります「チロンボ・マリーナ」というお店です。株式会社RYCO

ポレーションの横山社長（CP委員）のお店なんですけど「魚介好きによる、魚介好きのための、南イタリア港町の大衆食堂」がコンセプトで、本当に魚介がおいしいお店です。行方の食材を使ったこういうお店が、どんどん増えていけばいいですね。

小林 行方にもばんどう太郎とかありますけど、他にもいろいろお店ができて、食材を多彩に生かせればいいと思います。

木村 額賀さんはどうですか。お住まいは都内ですけど、こんなお店があつたらいいなとか、行方のこんなものが食べたいとか。

額賀 茨城はお米がおいしいんだなって東京に来てから気付いたのですね。料理より茨城県産とか、行方市産っていう言葉にもう少し、ブランド価値を高めた方がいいと思います。魚沼産コシヒカリって聞いただけでおいしいです。行方市産を「おいしいの代名詞」にできればいいなと思ってます。

木村 PRが必要だということですね。額賀さんはお米を推してくださっているの、ぜひお米大使として行方のPRをお願いしたいですね。

額賀 実家のお米売れないですかね。

木村 タイアップとかしてみたいですね。行方のお米も、もう少しブランド化してみたいですね。

6. 昔に戻れたら

木村 また行方の話なんですけども、もしお二人が行方に住んでいた頃にタイムスリップするとしたら、何がしたいですか。

小林 私は、鹿島鉄道に乗ってみたいですね。気動車といって電車ではないんですけど、油の匂いがある古い2両編成くらいの乗り物ですね。その頃は、何気なく乗っていましたが、もし鉄道ファンだったらとても素晴らしいと言ってもらえるような所をゆっくり走るんですね。昔の桃浦駅あたりなど、いろいろおすすめのポイントがあるんですけど、羽生方面はとも景色が良かったので、そこを走る気動車に乗ってみたいなというのがありますね。



木村 額賀さんはどうですか。

額賀 高校に戻っても少し理系の勉強をしたいと思いました。私は文系で、一応、物理と地学を履修したんですけど、化学と生物をやったなかったんですよ。理系になりたかったというよりは、当時、履修していなかった科目をやってみたいですね。なぜかっていうと、書き物を書いてる今になって必要になるんですよ。書くのに調べたりしていると、高校レベルの知識でも知っているだけで、最初の入り口がすごい広がるんですね。履修しても大学受験が終わったので、抜けているところが結構あるんですよ。当時は、なんでこんなインドネシアの王朝をやらなきゃいけないのかって思っていました。単元ごと捨ててたところが今になって、あれを知らないところが分からないうことが、すごい出てきたんですよ。なので、今から勉強し直したいですね。当時



に戻って将来使うからって、日本史をちゃんとやりたいですね。

木村 真面目で偉いと思います。本当素晴らしいです。

額賀 当時だと分からないですね。仕事で必要になると、腰を据えてやりたくありませんね。当時はテストのためにやっていました。

木村 それぞれ皆さん、思い残したことがあるようですね。行方とリンクさせてっていうこと何かありますか。廃校になった小学校に行ってみたいとか、そういうのはないですか。

額賀 今でもいいから行きたいです。私の通っていた中学校は、いま小学校になってるんですよ。

木村 じゃあ、中学校の場所に小学校が来たということですね。

額賀 合併した大きい小学校が中学校のあった場所にできて、通っていた小学校は今も建物はあると思います。他は多分何もないと思いますので、今からでも行ってみたいですね。

木村 思い出の図書室などをちよつと見てみたいですかね。

額賀 何にもないんですかね。ちよつと見てみたいですね。

木村 現在は行方を離れてそれぞれにご活躍中ですけど、行方のこ

とが好きで、その行方で育った子ども時代や青春時代のことが、作品や活動に染み出ると感じました。

小林 行方出身で良かったなって、年を重ねるにつれ、強く思うようになりました。若い時には分からないというか、気付かなかったです。**木村** 額賀さんは、まだまだこれからですかね。

額賀 これからちよつとずつ分かってくるんですかね。

小林 時間の経過とともに、同級生とかの変化や人生上のイベントが、それぞれあったりしてね。

木村 現在までお二人とも、C P委員もお願いしております。今後例えば「帰省メシ」が社会人をターゲットにした記事にすることや「タスキメシ」をテーマに今後のプロモーション活動のきっかけにしたいという話も聞いてます。今後も行方市のPRや食のPRにご協力いただきたいと思います。

7. 行方市の若者たちへエール

木村 多くの方に、行方市が魅力的な市であると思っていたために、メッセージをいただきたいです。



小林 行方市がすごくいいところなのは、住んでいる方たちが良く分かっていると思います。しかし、あんまり語らない、奥ゆかしくて。これからはもっと広く、全国的に知ってもらえるようになったらいいなと思ってます。皆さんも外から来た人やネットで調べてくれる人たちに向けて、いろいろ発信してほしいと思ってます。

木村 どうしたら若い方々、女性も含めて、行方に戻ってきてくれると思いますか。

小林 市外に出てる人は、頻繁に帰ってきて、いろいろ遊んでみたり、食べに行ってみたりするといいかもしれません。行方出身といっても案外知らないことが多いですからね。

木村 額賀さんは、今後の行方の発展についてどうですか。

額賀 小林さんの言葉を引き継ぐようになりたいんですけど、語るこ

8. 令和4年の抱負

て大事なんですよね。言わないって、いけないことと同義にされがちな世の中じゃないですか。だから、言うことってすごく大事なんですけど、そういうのはあまり得意な県民性じゃないっていうのも分かります。行方に限らず、茨城県民としてPR下手というか、でもそうも言ってもらえない時代なんだろうなとも思います。全然違うかもしれないですが、小説家という仕事をしても思いますし、自分から良いと思っただけのものを良いと言ったり、見てほしいものを見てほしいって言ったりするのは、大事だとも思います。

木村 小説家さんならではの意見だとも思います。自らここが良い、おいしいよと語り、発信していくことが大切ですね。

額賀 良いものが、勝手に口コミとかで広がっていく世の中でもないと思うんですよ。良いものでも見つけられなかったら流されてしまいますし、だからこそ発信することとか、語ることで大事だとも思います。

木村 額賀さんのような若手の方が、行方の良さを発信して語っていただければ、多くの若い人に行方の良さが伝わると思います。

木村 最後に、令和4年の抱負を伺いたいと思います。

額賀 世の中どう変わろうと、小説家をやることは変わらないです。物語で何を書いていくかが勝負の仕事なので、令和4年もたくさん書いていきます。今のところ、本もたくさん出る予定があるので、頑張っていこうと思っております。

木村 小林さんどうですか。

小林 私、仕事を細々と頑張ります。来年は、昔に書いた「ナースマン」という小説の何十年後というところで新連載を始めますので、それを頑張ろうと思えます。多くの方に読んでもらえるような作品を書きたいです。あと、コロナでお互いに触れなくなった、握手もしなくなった部分を、今後どういう風に取り戻していけばいいのかについても、看護の視点で考えています。



額賀 確かに、何のタイミングで握手を再開していいか、分からないですね。

小林 ハイタッチも取り戻さなきゃいけないですからね。考えていこうと思います。

木村 近々の著作含めて、何かご紹介いただければと思います。

額賀 近々ってわけでもないんですけど、一番新しい本が「風は山から吹いている」という登山の小説です。主人公が初めて登る山が茨城県の筑波山なんです。主人公の名前が、筑波山の筑波って書く、筑波くん、その子が自分と同じ山に登るところから物語がスタートしていくお話です。一番新しい小説で、青春山登り小説とでも言いますよ。二見書房から出ておりますので、よろしければお読みください。

木村 作家を目指す行方市の若い方へ、メッセージはありますか。

額賀 「書きたかったら書いて頑張れ」本当それだけなんですよ。作家を目指したい人にするアドバ

イスは「書いて頑張れ」ですね。

木村 力強いお言葉です。ありがとうございます。小林さん、著作などどうでしょうか。

小林 私は、2年近く新刊が出て

なくて、そのうち一番新しいのは、介護に関する本を出しています。エンゼルメイクにまつわる本も多く出していて、注文、依頼次第では、小説やエッセーを書いたりしています。ネットとかで見て、ぜひ読んでいただければと思います。講演もいろいろやってまして、だんだん対面でもできるようになってきたので、皆さま機会がありましたら、ぜひご参加ください。

木村 小林さん、額賀さんの作品ですが、市立図書館にも蔵書がありますので、ぜひ市民の皆さまは手に取ってお読みいただければと思います。そして購入していただければと思います。あつという間にお時間になってしまいました。和気あいあいと楽しい座談会になったと思います。行方は、最近人口が少ないという話がありまして、そのような中で、現役で活躍中の女性作家お二人のご活躍さまでもとてうれしく思っています。本当に誇らしいことです。これからもお二人のご活躍を心から願っております。良い1年になりますように。本日はありがとうございます。